

## — 第33編 — 珠玉の人工水都、デルフト<sup>\*1</sup>

70年代の半ばに、私は仕事でドイツの仲間と中近東を往復していた。アジアと欧州とアラブ世界の3つの異なる文化圏を行き来しながら、毎日がとても刺激的であった。その出発点となったパリの設計事務所は13カ国の国籍で溢れていたし、思想や宗教や生活文化の

るつぼのような中で、激しくぶつかり合う多様性は日々当たり前の姿であった。EU統合のはるか以前だったその頃、多くの国境が複雑に入り組む欧州にあって、私は小国の存在に徐々に興味向き始めていた。

既に世を去ったが、仲間の一人にデルフト在住のニルツがいた。かつての世界的なオランダ人建築家・都市計画家ヤコブ・バケマ<sup>\*2</sup>の息子である。彼のおかげで、あの奇跡的な絵画を残した画家フェルメール<sup>\*3</sup>の生地、デルフトを何度となく訪れることができた。埋め立てて人工的に作られた国オランダは海とともにあり、海洋性の闊達で開放的な国民性が周囲の



写真33-1 デルフトの運河と街並み

国々との大きな違いである。そこで育まれた国際的な都市文化は、ドイツ人をして羨望の目を向けさせる。かつて海を征した者への憧憬とも重なり合う、独特な空気がオランダの都市には充滿しているのである。

それにしても、どうして道端の窓があんなに大きいのだろう。通りからの視線の侵入をむしろ歓迎しているかのように思われる低く大きな窓周りの表情。それは、低層の建物群のギザギザのファサードとともに連続し、ここがオランダであることを主張している。そして、今に残るフェルメールのイメージに包まれながら、個々の住み手の自発的な巢作りの手の跡がそこかしこに見受けられる。それぞれの思いが一軒一軒のファサードに宿る。それは驚くほど多彩で自由だ。

そして運河。ガードレールのない道端の水面は、うつろう時と季節の空とまちなみを移してゆらぐ。ゆらいで形と色と光が溶け合う（写真33-2）。住み手には、さらに通りや運河からは見えない奥の中庭を囲む静かな生活空間がある。

このように、コンパクトな空間の中に凝縮されたデルフトの豊穡なまちなみは、巨大スケールの都市開発や新奇性の繰り返しに疲れた私たちの目と心を癒してくれる。それは、生命の宿る住まいやまちそのものなのだ。



写真33-2 水面に揺らく民家

\*1 Delft: 南ホラント州にある基礎自治体。人口約9.6万

\*2 Jacob B. Bakema (1914~1981)

\*3 Johannes Vermeer (1632~1675)